アーレントにおける「悪の凡庸さ」について
―『全体主義の起源』をもとに考える―

山口大学教育学部　社会科選修４年　森山　竜純

はじめに

2016 年 7 月 26 日未明に神奈川県相模原市の知的障碍者施設「津久井やまゆり園」で発生した「相模原障碍者施設殺傷事件」。入居者 19 人を殺害、26 人に重軽傷を負わせた植松聖(事件当時 26)は、犯行動機について「意思疎通のとれない障害者は安楽死させるべきだ」「重度・重複障害者を養うには莫大なお金と時間が奪われる」などの自説を展開し、世間に衝撃を与えた。その事件が起きた当時に私が最も衝撃を受けたのは、彼の「重度障害者は殺したほうがいい、生きていても仕方がない」という主張に全否定できなかった自分に対してである。命は平等なもの、奪われてはいけないものであるとわかっていながら、私はなぜか植松を心の底から否定することができなかった。そして大学の講義で、植松を否定できなかった自分と再会することになる。講義の中で「アイヒマンは有罪か否か」という話があった。その中で「われわれ一人一人のうちなるアイヒマン」という言葉を知った。数百万の死に関与したアイヒマンが私の中にもいるかもしれないと思ったとき、衝撃ではなく身が頷いた。アイヒマンの立場になると自分も同じことをしてしまうのではないかと恐ろしくなった。多くの死に関与している人間に、自分が全否定できないという不思議さの正体に迫りたくなった。さらに調べていくうちにホロコーストが起きた当時のドイツの人々がホロコーストに一切反対の声をあげず黙認したという事実を知り、不思議に思うとともに、私も当時のドイツに生きていたとしたら、黙認してしまっていただろうとも思った。そして、ハンナ・アーレント著『エルサレムのアイヒマン』で報告されている「悪の凡庸さ」という言葉について知る。「悪の凡庸さ」が当時のドイツの人々、そして私にも深く関係があることであると確信し、アイヒマンとドイツの人々の心理を哲学的な視点から考察することを決心した。

第１章　大衆のメンタリティ

まず、ホロコーストを積極的に支持したのではなかったとしてもそれを黙認する土壌となった「大衆」のメンタリティについて、『全体主義の起源』から考察する。アーレントによれば「大衆」は政治に無関心である集団のことであり、彼らは政治的に中立の態度をとり、投票せずに政党に加入しない生活で満足している（『全体主義の起源３』ｐ11)。「大衆」はもともと階級社会の中で生きていたが、階級社会が崩壊してしまう。普段から政治を他人任せにしている人も景気が悪化し社会に不穏な空気が広がると、にわかに政治を語るようになる。そのようにして、階級社会の崩壊によって政治に無関心であった大衆は憎悪を燃やす大衆へと変容する。ホロコーストに反対の声を挙げなかった「大衆」の特殊なメンタリティは、全般的崩壊の雰囲気の中でできあがったものであり、彼らは大衆社会以外の社会を知らない大衆ではなく、一つの階級社会の崩壊の産物である。大衆が生きていた階級社会は個人

主義的なものとして捉えられている。その個人主義が染みついているため、階級社会が崩壊した後も、大衆はこれまでと同じ考え方しかできない状況になっているのである。個人主義的な考え方の中で自分自身を評価し、大衆は自らを敗残者であると見なした。したがって、「自分自身など問題ではない、自分はいつでもどこでも取り替えがきく」という自己保存の本能の典型的な退化と結びつくことが多かった。大衆は自分自身への関心を失ってしまったのである。(同 p 22)

さらに大衆は、階級社会という共同の世界が崩壊することによって、日常生活における不安や気遣いを失う。共同の世界での利益が何の意味もなさなくなってしまうことによって、日常的な問題に関して無関心になり、「世界観的な問題」のような大きな世界観に対しての関心しかなくなった（同 p 23)。共同の世界が崩壊していく中において大衆が求めたのは、厳しい現実を忘れさせ、安心してことのできる「世界観」であったのだろうと考えられる。大きな世界観への逃避は、彼らに最低限の自尊と人間としての尊厳を保障してくれると思えるのである(同 p 89)。

第 2 章　アイヒマンのメンタリティ

アイヒマンはどのような人物だったのか。裁判が開かれるまで当時の人々はもちろん、アーレントでさえもアイヒマンは非道な人間に違いないと思っていた。しかし実際は違った。数百万人の死に関与したアイヒマンは「ひどく、恐ろしいまでに、普通」であり、ユダヤ人に対する嫌悪や憎悪、イデオロギー的狂信に満ちた怪物的人間からはほど遠い、どこにでもいる普通の人間であるように見えたとアーレントは記している（『エルサレムのアイヒマン』p 380)。アイヒマン自身は「最終的解決において私の演じた役割は偶然的なものにすぎず、ほとんどどんな人間でも私の代わりにやれた。それゆえ、潜在的にはほとんどすべてのドイツ人が同罪である」と主張しており、自分の内面や動機は犯罪的性格を持っていない上に潜在的には他の人たちも同じであると述べている（同 p 383)。しかし裁判においては、アイヒマンがしたことの現実性と他の人々がしたかもしれないことの潜在性とのあいだには大きな違いがあり、判事たちの関心をひくのはアイヒマンのしたことであったと (同 p 383－384) 記されている。

またアーレントは、アイヒマンについて自らの昇進のためにヒトラーの意向に従っただけの平凡な官僚だったと語っている（同 p 395)。たまたま与えられた仕事を熱心にこなしていただけにすぎず、ユダヤ人に対する憎しみはなかった（同)。アーレントはアイヒマンについて「彼は自分のしていることがどういうことか全然わかっていなかった」(同）と述べているが、そもそも人間は誰でも、自分がしていることの意味を深く考えることができないのではないかと考えられる。例えば、食事をしている人が「そもそも自分は、なぜ食事をしているのだろうか」と思い悩むことがないように、アイヒマンもユダヤ人問題の最終的解決における自分の任務を遂行しているとき、人が人を殺めるとはどういうことなのか考えていなかったのではないかと考えられる。

さらに、アイヒマンは話す能力と思考する能力が欠如しており、自らの言葉で自分の行為や自分の置かれた場所を説明できない、というのである（同 p 68）。アーレントによれば、アイヒマンは重要な事柄や出来事について言及するたびに、驚くほど一貫して一言一句同じ決まり文句を繰り返していた。そのため、アイヒマンとはコミュニケーションが不可能だったとも述べている（同 p 69）。彼が嘘をつくからコミュニケーションが不可能なのではなく、想像力の欠如という壁に囲まれているからだと表現している（同）。想像力の欠如についてアーレントは、「誰かほかの人の立場に立って考える能力」の不足と言い換えている（同 p 68）が、人間は誰しも結局のところ自分中心で考えてしまうため、誰かほかの人の立場になるという行為ができないのはアイヒマンに限ったものではないのではないか。

想像力の欠如についてアーレントは「彼は愚かではなかった。まったく思考していないこと—これは愚かさとは決して同じではない—、それが彼があの時代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ。」（同 p 395）と論じている。アーレントのいう「まったく思考していないこと」とは、前段落で述べたような、そもそも人間が自分がしていることの意味を深く考えないことや誰かほかの人の立場になって考える能力の不足というような想像力の欠如のことであると考察できる。このことが「凡庸」であり、そのような意味でアイヒマンは普通でありノーマルであると考えられる。しかしながらアーレントは『エルサレムのアイヒマン』の中でアイヒマンを、ホロコーストに巻き込まれてしまった平凡な市民だと同情しているわけではない。アイヒマンのことを「凡庸」と指摘することによって、それまで人間が当たり前であるとか普通であるとしてきたことに一石を投じ、思考するきっかけを与えてくれたのではないかと考えられる。

「まったく思考していない」ことについてアーレントは「思考していないことは、人間のうちにおそらくは潜んでいる悪の本能のすべてを挙げてかかったよりも猛威を逞しくすることがある」（同 p 396）と論じている。一般的な悪人のような能動的に悪いことをしようと企んでいる場合の「悪」よりも、想像力の欠如によって生まれた受動的な「凡庸な悪」の方がより大きな悪になることがあるということである。

このように、アーレントによればユダヤ人絶滅という「最終解決」の責任者として、多くのユダヤ人を絶滅収容所に送ったアイヒマンは非道な人間ではなかった。しかし、アイヒマンの特徴である「まったく思考していない」という想像力の欠如そのものが「凡庸な悪」と関係があるのではないかと考えられる。

第 3 章　悪の凡庸さ

「まったく思考していないこと」と「悪」の関係について考察していく中でアーレントにおける「悪の凡庸さ」とは何なのか論じていく。

アイヒマンは「まったく思考していない」と指摘され、それが「悪の凡庸さ」を生むとされていたが、ホロコーストに反対の声を挙げなかったという事実を考えると、第 1 章で論じた「大衆」にも「まったく思考していない」ことがあるのではないか、そうだとするならば

「大衆」にも「悪の凡庸さ」を生む部分があるのではないか。

しかしながら、『〈悪の凡庸さ〉を問い直す』において百木氏も「アーレントもまた、ナチ体制に無批判に従い、結果的にその悪に加担した多くのドイツ市民の道義的問題について論じている。しかし彼女は、そうした「平凡な」市民たちがナチ体制を支持した問題を重く見つつも、そこに〈悪の凡庸さ〉という概念を当てはめて批判することはけっしてなかった」と指摘しているように、今回扱っているテキスト内でも、アーレントは「大衆」を「凡庸な悪」と言っていないのである。

そのことを踏まえると、「大衆」の「悪の凡庸さ」について論じていく前に、「大衆」と「アイヒマン」について比較するべきであるといえる。「大衆」と「アイヒマン」の違いはどこか。第一に両者の大きな相違点に「共通の世界」が存在しているか否かがあるのではないか。言い換えれば、没入できる世界があるか否かが両者の大きな相違点ではないか。以下にそのことを論証する。

大衆は階級社会の崩壊の産物であるため、自分の生きている世界がなくなっており、孤立化させられた個人によって構成されている。つまり、大衆は「共通の世界」を失った状態にある。それに対して、アイヒマンはナチス組織の中で生きているため、ナチスという「世界」を持っていると言える。彼がナチスの中での昇進のことしか考えていなかったことからわかるように、私たちにとっての「日常」がアイヒマンにとっての「ナチス」であると言える。私たちが日常に没入して生きているように、アイヒマンはナチスという世界に没入して生きている。

第二に、両者とも「まったく思考していない」ことがあると述べたが、何を思考していないのかの違いもあると考えられる。

「大衆」は何を思考していなかったのか。第１章で述べたように大衆は階級社会の崩壊の産物であるため、個人主義的な考え方が染みついている。こうした状況下の個人主義というのは自分の存在価値や生きる意味を保障されなければならない状態と解釈できる。また同じく第１章で述べたように、階級社会という「共通の世界」があると、他人の思想に依存することで自分の価値を見出すことができていた。しかしながら、階級社会の崩壊により他者との繋がりを喪失し、自己喪失をしてしまった。自分はいつでもどこでも取り替えがきくというような感情の没我が起こってしまった。「共通の世界」や「他者」に依存できなくなってしまった結果、大きな世界観に傾倒するとアーレントは語っていた。

大きな世界観に傾倒するのは、階級社会の崩壊によって共同の世界を失ったことによって、当たり前なことや常識が力を失い、従来とは異なる「世界観的な問題」や「大陸の規模」に飛び込むしかなかったからである。この「しかなかった」に大衆が思考できなかった部分があるのではないだろうか。大きな世界観に傾倒した時、彼らは主体的に自分で動いたつもりだろうが、依存するしかなかったという状況であるため、動かされたと表現するほうが適切であろう。また、アトム化した大衆にとっては共通の世界が喪失し、日常というものがなくなっているため、日常に没入することすらできない。

つまり、階級社会で生きていたときは、「日常」という共通の世界という安心できる場所があったため、人間存在の不安を感じることはなかったが、階級社会が崩壊したことによって孤立し、自分自身以外に頼れなくなった社会では、第１章で述べたような共通の世界において感じられた不安とは異なる、人間存在としての不安が自覚される。人間存在の不安は誰しも持っているが、何かに没入することで気づかずにいるのである。自分自身の状態が不安定であればあるほど大きな世界観に飛びつきやすくなる。自分の存在の安心を確保できる場所を失った不安定な人間は、何も考えずにその大きな世界観に飛びついてしまうのである。そうなってしまった人間は飛びつくことを避けられない。

大衆が思考できていなかったのは、人間存在としての不安を感じたときに思想に心酔すると、その思想に飛びつくのを避けることができないという潜在的な人間の特徴についてであると考えられる。

第２章で述べた「アイヒマン」は、ユダヤ人絶滅という「最終解決」の責任者として、多くのユダヤ人を絶滅収容所に送った。アーレントが「まったく思考していない」ため、「悪の凡庸さ」と表現した彼は何を思考していなかったのか。

アイヒマンも社会人になってからナチ党に入党している時点でナチスの世界観に飛びついた「大衆」の一人と捉えることができる。したがってアイヒマンにおいても「思想に心酔すると飛びつくのを避けられない」ということが「まったく思考していない」ことであると考えられるが、さらに別の「まったく思考していないこと」があるのではないか。

アイヒマンはナチスの中での昇進について熱心であったことからも、すべての事柄において「まったく思考していない」わけではない。むしろ熱心であった昇進については深く考えていたとも解釈できる。しかし、ヒトラーの言う通りに動けば、ナチスの中で昇進できるというヒトラーに対する忖度の感情があることを考慮すると、「考えさせられていた」とも解釈できる。彼自身で考えていたにせよ、考えさせられていたにせよ、「まったく思考していない」とは思えない。

第２章において、そもそも人間は自分のしていることを深く考えない性質があり、アイヒマンの場合は人を殺めるときに人が人を殺めるとはどういうことなのか想像することができていなかったと述べた。では、私も含めた「人間」が自分のしていることについて思考できないのはなぜなのか。それは「日常性に没入する」という人間の潜在的な特徴によるものではないかと言うことができる。この「日常性」というのは、単なる日常生活のことではなく、没入することを避けられないもののことを指す。普段から生活していて自分の行動に疑問をもたないのは、人間が日常に没入しているからなのである。普段生きていて疑問に思ったり考えたりしているのは、すべて日常というシステムの中での思考なのである。アイヒマンの場合は当初「大衆」として共同社会としての「日常への没入」が奪われたが、それだからこそ一層、無意識でナチスという共同体に没入していったのではないか。今や彼にとっての日常はナチスという世界であり、ナチスの中でしか生きていない。この場合、アイヒマンが思考するのはナチスの中での自分のことであるため、彼はナチスの中での自分の昇進以

外のことは考えなくなる。

また、アルゼンチンにいる時のアイヒマンは『エルサレム〈以前〉のアイヒマン』において、「学問好きで啓蒙と国際主義を好み、自然を愛する普通の男」(『エルサレム〈以前〉のアイヒマン』p501)と表現されており、「それぞれの環境によって自分を演じている」という特徴もあると考えられる。日常性に没入することによって、その日常の中での自分を演じているため、本当の自分という存在もわからないし、自分が何をしているのか考えることができない。

アイヒマンが「人が人を殺めるとはどういうことか」ということについて思考できていなかったのは、「日常性に没入する」という潜在的な人間の特徴によってナチスの中に没入してしまったからではないか。

これらのことを踏まえると、「大衆」と「アイヒマン」、この両者とも潜在的な人間の特徴に関して思考していない部分があると考察できる。つまり「人間らしさ」について思考ができていない。大衆は「人間はある思想に心酔すると、その思想に飛びつくのを避けることができない」という人間らしさについて思考することができていない。不安定な状態になると分かりやすいものに飛びついて安心したいという「人間らしさ」がある。そしてアイヒマンは「日常性に没入する」(人間存在が抱える不安などから目を逸らし、考えたくないものは考えない)という「人間らしさ」について思考することができていない。考えたくないことは考えず、自分の昇進のことのみを考えているという点においてアイヒマンは「人間らしさ」がある。自分のしていることがどういうことか全然わかっていないという「人間らしさ」がある。

しかし次のようなことも考えなければならない。それは、そもそも「人間らしさ」について思考することができないということが「人間らしさ」であるということだ。「人間らしさ」について思考できるようになるためには、「人間らしさについて思考できない人間らしさ」という問いのループについて思考しなければならない。

また、アーレントは全体主義の本質について、「人間を吏員に、行政装置の中の単なる歯車に変え、そのようにして脱人間化することである」(『全体主義の起源３』p 397－398)と論じている。つまり、大衆は全体主義によって「脱人間化」させられているのである。大衆は飛び込むしかなかったがために歯車になった＝脱人間化したのである。つまり、「人間らしさ」の故に「人間でなくなった」のである。歯車になってしまっているという点でアイヒマンも大衆も脱人間化している。

「大衆」のことを「凡庸な悪」であるとアーレントは言っていないが、やはり誰もが陥る悪であるという点で凡庸であるのではないか。「悪の凡庸さ」とは歯車になって脱人間化したことによって思考停止した人間から生まれるものである。そして誰もが陥る悪であるという点で「凡庸さ」がある。

第４章　「悪の凡庸さ」を克服するために

「悪の凡庸さ」の正体を考察していく中で、もし私が大衆の中にいたとしてもホロコーストに対して反抗できないのではないか、さらに条件さえ揃ってしまえば、「凡庸な悪」に(アイヒマン)なっていたのではないかという自分自身に対する恐怖を感じた。そのため、「悪の凡庸さ」を克服するために必要なことは何か考えたい。

「悪の凡庸さ」を克服するためには「人間らしさ」について思考をしなければならない。しかしながら「人間らしさ」について思考できないことがそもそも人間らしいため、思考しなさいと簡単に言っても意味がない。しかし、人間は「人間らしさ」を思考できないということを知っていることは大きな意味があるのではないか。

大衆の場合で考えると、人間存在の不安に直面した人間は思想に心酔すると飛びつくことを避けることができないということを知っているか否かは大きな違いとなる。ナチスの大きな世界観に飛びつくしかないのかと一瞬でも疑うことができれば、踏みとどまる可能性がある。思考できるようになるためには、知ることが重要である。しかし、飛び込むしかなかったという状況で、結局回避できないのであれば、そもそも踏みとどまることもできないのではないかとも考え得る。だからと言って「人間らしさ」について思考できないのが人間であるのだと考えるのをあきらめることはできない。

私の思考の出発点になった「やまゆり事件」や「ホロコースト」などの「体験」は、現に起っていることや過去に起こったことであり、その「体験」によって私たちは否応なく驚かされる。そして「体験」をしてしまうと、「人間とは何か」と問わざるを得なくなっている。しかしながら人間はそういう問いそのものからどうしても目を背けてしまう。しかしこのように人間が人間らしさについて考えて、考え抜いた先に現れてくる「人間らしさについて思考できない」「人間とは何かわからない」という自覚こそが、現在進行形で起こっている「体験」から目を背けることなく「人間とは何か」と常に考えながら生きることを私たち人間に促すものなのである。

【テキスト】

ハンナ・アーレント
『全体主義の起源　3』全体主義　[新版]
大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、2017 年

ハンナ・アーレント
『エルサレムのアイヒマン』悪の陳腐さについての報告　[新版]
大久保和郎訳、みすず書房、2017 年

【参考文献】

『エルサレム〈以前〉のアイヒマン』大量殺戮者の平穏な生活
ベッティーナ・シュタングネト　香月恵里訳

『〈悪の凡庸さ〉を問い直す』
田野大輔・小野寺拓也［編著］　香月恵里・百木 漠・三浦隆宏・矢野久美子［著］
大月書店、2023 年

『悪と全体主義』ハンナ・アーレントから考える
仲正昌樹、NHK 出版、2018 年